

浜松空襲について

村瀬隆彦

前回、浜松地区が軍事産業と軍隊配置という点から、軍との関わりのなかで「発展」してきたことについて、荒川章二氏からお話があったと思います。そして、第三回の講座では、竹内康人氏から、実際に残る戦争遺跡（遺構）についてお話があることと思います。その間に位置する今回は、浜松地区と戦争を考える上で欠くことのできない空襲と艦砲射撃について考えてみます。

研究の流れ

↑空襲に関する資料

最近「空襲」ではなく「空爆」という言葉を使うことが増えています。しかし、私は「空襲」でいいのではないかと思います。爆弾ばかりではありませんから。撃つ

たものが機関銃であろうと爆発物であろうと、空から襲われるのだから、「空襲」のはずです。ですから「空襲」という言葉の方がいいと思っています。この「空襲」に関する研究の流れについて、最初に概観しておこうと思います。

空襲に限らず、歴史を考える上で重要なのは資料です。資料は、誰によって書かれたか、どのような目的で書かれたか、いつごろ書かれたかなど、いくつかの要素によって、信頼できるかどうかを確認しながら使用します。

人間の記憶は時間が経つとあいまいになっていたり、印象が薄れていたり、逆にある部分だけ強くなったりするものですから、できれば、当事者がその直後に記したものがあれば良いのですが、戦争では、当事者の一方（被害者）は死亡しており、殺人事件の捜査のような難しさがあります。

空襲に関しても、最も証言をうかがいたい人は死亡しているわけです。死亡した人の目線での事実確認という視点を、忘れてはならないでしょう。

さて、米軍による静岡県内各地への空襲についての研究を、資料別に四つに分けて考えることができると思います。

十 空襲被害調査

一つめが、日本の行政機関によって確認された、空襲の被害に関する調査です。古いものでは、一九四五年七月三日付けで調査結果がまとめられています。

東京の恵比寿に、防衛省の防衛研究所という施設があり、その中に図書館があります。そこは自衛隊の敷地の中にあるため、面会票を書いて中に入ります。閉架式ですから全部目録を引かなければいけません。その中に陸軍省調べの空襲記録があります。陸軍省の調べでは、被害を非常に少なく書いてあるのが印象的ですが、この数字は内務省管轄の調査と大きく異なっています。

手軽に見ることができるものに、『静岡県史 資料編20 近現代5』所収の静岡県調「静岡県ノ戦災概況ト其ノ処理等ニ関スル書類」があります。この資料は、戦争経済の維持という観点から記載されているように思います。

十一 証言集

二つめが、空襲体験者による証言集です。浜松・静岡・清水・沼津などで、「大空襲」の体験談を中心にまとめられたものが知られています。

一九四五年にあつたできごとをまとめることができたのは、一九七〇年代になってからです。米軍の占領によって空襲を語ることが憚られたこともあるでしょうし、空襲による被害を語ることというものが、ベトナム戦争の時の北爆反対の動きとも関連するという研究もあります（小山仁示『米軍資料日本空襲の全容』）。

歴史の資料としては、直後の証言ではないだけに、また、「忘れよう」と思つての毎日であつただけに、貴重な証言であると同時に、記憶の曖昧さが残る資料として慎重に扱う必要があると考えます。

浜松では、浜松空襲・戦災を記録する会『浜松大空襲』が知られています。この本は、一九七三年の六月一日、すなわち浜松大空襲の「記念日」に刊行されています。

なぜ一九七三年なのか、昔から不思議に思っていました。なぜ戦争が終わってからかなり時間が経たないと、このようなまとまった本が出ないのかと思つていたのです。

この本にも、「この表面おだやかに見える日本の平和にも、これをおびやかす何かが皆無だとは云い切れない昨今」と

あり、記録を残すことが重要である、と書かれています。

しかし僕の場合は、やはり嫌なことは忘れたい、つまり、身内が悲惨な死を遂げたわけですから、それを直後に冷静な気持ちで克明に記録するなどということは、やはり普通は嫌なことではないかと思えます。

もちろん戦争に負けた後は米軍が占領しますので、アメリカのことをあしざまに書くことは憚られたと思いますし、そのあと高度経済成長があり、それが終わって一段落してから、各地で空襲体験者の証言を集めた本が刊行されるようになったのでしょうか。

このような本は浜松だけではなく、静岡では一九七四年、清水でも同年に出ています。沼津はこのように一冊にまとまった厚い本は出ていませんが、沼津史談会からまとめた本が出ています。このように、一九六〇年代終わりから七〇年代くらいに、体験者の証言を集めた本が出てきます。

✦米軍資料

三つめが、米軍の資料で、米国戦略爆撃調査団の記録や、米軍部隊の戦闘記録類です。米国ではこのような軍事機密に係る資料でも、二五年を経過すると開示されます。

多くの日本の研究者が米国の公文書館に行って、とにかく

目録を見てこれだと思うものを、読んでいる暇がないから片端からコピーして持ち帰り、一年かけて翻訳しながら研究を進めています。

現在では、どの地区の空襲についても、従来の研究成果を塗り替える研究が進んでいます。その多くは、米軍資料の精査によるものが大きいといえるでしょう。『空襲通信』という、米国資料の紹介もしている雑誌も刊行されています。

浜松では、阿部聖氏の一連の研究が中心となります。『米軍資料から見た浜松空襲』が、もっとも読みやすくとめられています。

ただ、この一冊にまとめるためにたくさんの論文を書かれています。レポートの翻訳およびその解釈について、ほとんどが『遠江』という雑誌に載っています。

阿部氏は、これまでの研究成果や警防団の日記等も含めて総合的に研究を進めておられます。今回の報告も、阿部氏の成果なくしては成り立たないものです。

✦個人の資料

四つめが、市史編さんや、個人調査によって「発見」された資料です。個人で空襲のようすを日記に記していたり、警防団等で警報の発令・解除を記録していたり、学校の日

誌に児童の被害が記されていたりするものです。

浜松では、浜松市立中央図書館が刊行している、『浜松市戦災史資料』があります。静岡県には、県立博物館も公文書館もあります。県立中央図書館は、調査・研究のための図書館として機能していますが、刊行していた雑誌も廃刊となり、歴史文化情報センターがあるとはいえ、地域の歴史研究情報の発信機関としての役割を十分果たしているとはいえません。浜松市立中央図書館の活動は、その対照をなすものと感じます。

資料の話と観点は異なりますが、次回で報告される竹内康人氏の調査も見逃せません。竹内氏は、『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』を二〇〇七年に刊行されています。亡くなった方々の個人名が掲載されるのが特徴です。

人は最後には数で把握されるものではありません。一人ひとりの個人はかけがえないものです。竹内さんの、氏名で確認してこういう姿勢は大きく評価されます。

だとすれば、空襲での死亡といっても、その死を個々の人のものとするには、詳細な状況の把握ができる情報がなくてはならないでしょう。そのためには、詳細な事実確認のための資料が必要です。

↑『中小都市空襲』

一九八八年に画期的な本が出ます。奥住喜重さんが書いた『中小都市空襲』という本なのですが、奥住さんは歴史の専門家ではありません。工学、自然科学分野が専門で、実際に爆弾を落としたときにそれがどのように落ちていくのか、被害はどのように広がるのかということを、科学的に非常にシャープに描いています。

この本の画期的なところは、米軍の資料をふんだんに使って、それを読み込んでいるところです。日本軍には、戦闘が一段落した段階で、自分の損害、相手に与えた戦果などを書いて、上級の部署に提出する「戦闘詳報」という報告書がありますが、米軍のものはものすごく精緻です。

日本を空襲した部隊が、自分たちがどのような攻撃を行ったのか、どのような成果があったと思われるのかというようなものをレポートしているのですが、使用した燃料の量や当時の天候などが非常に細かく書いてあります。その分析を加えて一冊の本に読みやすくまとめられたのが、この『中小都市空襲』という本なのです。

これまで空襲の調査というと、だいたい東京をはじめとする大都市が中心でした。広島、長崎のように原子爆弾を落とされたところとはかく、一般空襲に関してはやはり大都市中心だったのですが、この本が出たおかげで、中

小都市の空襲をどのように考えたらいのかということが、ようやく分かるようになったわけです。その後、各都市では、自分のところが書かれているレポートはないか、それらを集める競争になっていきます。

十 米軍資料の信憑性

空襲体験者の証言集に比べ、米軍資料は記載が詳細で正確な印象を受けます。しかし、この英文の資料についても、本当に確かなのか。批判的に読んでいく必要があることに変わりはありません。

米国の資料は数字が精緻で、読んでいるとなるほどと思わされます。しかしその一方で、日本軍の戦闘詳報を読んだ経験からいうと、「本当にそうなの？」とも思うのです。

戦闘詳報は自分の部隊がいかに戦果を上げたかという観点を抜きにしては書かれません。自分は戦ったけれども、「何の戦果も上げませんでした。申し訳ありません」というレポートはやはり書きにくいでしょう。ある作戦行動に参加した以上、何かしらの成果を上げたのだという形で書いていくものではないかと思うのです。

この戦闘詳報をどのように読むかということで参考になったのは、山本七平さんが書いた『一下級将校の見た帝国陸軍』という本でした。この方は、大砲の弾を撃つ係を

していたのですが、「一〇キロ先で当たっているか当たっていないかは分からないけれど、とにかく撃った。撃って、全弾命中と書いた」というのです。確かにそのようなものなのだろうと思います。

最近では『新編浜松市史』の資料編の中には、浜松を艦砲射撃した艦長さんが戦後すぐに『静岡新聞』に書いたものが転載されていますが、「戦果は自分では目で見ていない。当たったか当たらないかは分からない」と書いています。当たったか当たらないか分からないにも関わらず、戦果として何%という数字が並んでいるのです。それを見ると、どこまでが本当なのか分からなくなります。

十一 「圧縮度」

このように、任務の達成度については、部隊の手柄になることが意識されて記されていることがありますが、空襲に関してこのことを示す事例として「圧縮度」があります。

これは米軍が注意していたもので、ある都市を空襲した時、攻撃に参加した航空機の九〇%が、何分間で攻撃したかを記した数字です。短い時間に多くの航空機が爆弾を投下した方が被害が大きいですから、少ない時間の方が効果的な攻撃ということになります。

たとえば、浜松を空襲するB29の部隊を想像してみてく

ださい。それも、高空から高性能爆弾を落とすのではなく、大空襲の夜を考えてみてください。

灯火管制されているので、地上は真っ暗です。レーダーを使つて進入します。B 29も落とされたくないですから、全速を出しています。約七トンの焼夷弾を一機で積んでいますので、全速を出しても時速三五〇キロから四〇〇キロくらいしか出ませんが、それでも浜松の市街地上空を飛び去るのは、ほんの数秒です。

浜松のような小さい市街地の上を飛び、そこに焼夷弾を的確に落とすのは、非常に難しいことです。タイミングが少しずれただけで、まったく違うところに落ちてしまいます。

六月一八日の浜松大空襲の場合は、伊勢湾沿いに入つて来て、浜松で落として、横須賀から海に出て、帰っていききました。落とした後、急旋回して自分の基地の方へ戻っていくわけです。

浜松などを空襲するB 29の部隊は一二〇機くらいですが、特に夜間空襲の場合は、米軍の中でもっともベテランで、もっとも腕のいいレーダー手が乗っているB 29が六、七機選ばれて、そのレーダー手が見ながら最初に焼夷弾を落とします。そうすると炎が出ますから、後ろの飛行機はレーダーを見ないで、燃えている焼夷弾に向かって焼

夷弾を落として南の空へ逃げて——当時の言葉で言うところ「脱去」して——いくわけです。

そのときに上司から命令されているのは、最初にベテランパイロットが焼夷弾を落としてから、最後のB 29が落とすまでの間の時間を短くすることです。この時間が短ければ短いほど褒められたようです。

たとえば同じ一〇〇発の爆弾を落とすのも、一度に一〇〇発落ちるのと、一時間に一発ずつ一〇〇時間かけて落とすのでは、当然一度に落とした方が相手に対するダメージが大きいわけです。これが「圧縮度」で、ノルマとして課されているのです。

浜松の場合は、六月一八日の空襲で、六六分です。六月一八日の空襲では、マリアナのサイパン島の上空で飛んだ約一二〇機のB 29が編隊を組み直して来るわけではなく、一機一機の飛行機が燃料を節約するために自分で飛びます。伊勢湾の上空で浜松の方に旋回をして高度を下げながら速度を上げ、焼夷弾をバラバラと落として南へ行くのですが、約一二〇機が六六分ということは、約三〇秒に一機進入しているのです。

空の上での三〇秒は、ちょっと間違えれば衝突する距離です。時速四〇〇キロ出ている飛行機の三〇秒間隔の話です。ので、車の三〇秒とはわけが違います。

はたしてそのようなことが可能なのかという疑問があります。したがって、これが、どの程度正確なのかは、日本側資料との突き合わせも必要になってきます。

藤枝防空監視哨の記録

↑藤枝防空監視哨資料の概要

このようなことを考える時に、日本側の客観的な資料として注目されるのが、防空監視の資料です。浜松の防空監視隊については『浜松大空襲』の本の中にも載っていますが、今日ご紹介したいのは、藤枝の防空監視哨の記録です。

これは、藤枝市在住の方が藤枝市郷土博物館に寄贈された資料です。おじいさんが亡くなって、重要な資料だというのを聞いていたから博物館に持ってきたというのです。

実は、藤枝の防空監視哨の哨長さんは、戦争が終わった時に、書類を焼けという命令をもらいます。これは有名な話で、戦争が終わると、そこら中で重要機密書類を焼く炎が上がっていたという話が記録されています。これは防空監視哨だけではなく、浜松の飛行場の記録も、浜松の陸軍飛行学校も高射砲も航測部隊も毒ガス部隊も資料を焼いたはずです。

ところが、藤枝の防空監視哨の哨長さんは、「これは焼い

ちゃいけない資料だ」と思って、大事に家まで持って帰って、ダミーを焼いたようなのです。その一つが「指揮連絡通帳」というもので、昭和〇〇年の〇月〇日の〇時〇分にB 29がどこにいる、〇時〇分にどの地区で空襲警報が出た、何時何分で解除になったという記録が書かれています。指揮と命令を受けたのを全部記録している帳簿です。

↑資料としての信頼性

また、監視哨から見えたもの、きこえたものも書かれています。これは、浜松と静岡の空襲について確認するための新たな事実を提供するものだと思います。

一つは、この記録を書いた人が当事者ではないということです。当事者ではないので、戦果を上げたことを誇張して書く必要がないのです。

もう一つは、正確に見て正確に記述することが仕事だったということ。正確に書けば書くほど褒められる仕事なので、ある程度信頼できる記録であると思われます。

このことを示すエピソードがあります。この人たちは一度怒られているのです。夜は飛行機が見えないですから、爆音で判断します。何回も何回もB 29が飛んでいれば、B 29の音だと分かるようになります。しかも爆弾を積んでいるのか落とした後なのかまで聞き分けられるということ

す。夜なので見えていない。見えていないけれども確かにB 29の音なのでそう書いたら、「B 29とは書くな」と怒られたそうです。「大型双発機とか敵大型爆撃機と書け。B 29と書けるのは、実際にサーチライトで照らされたり昼間に見た時だけだ」という指示まで出ているのです。

つまり、聴音のみで絶対確実でない場合は、機種を報告しないよう軍から指示されているのです。視認の場合のみ、機種の記載があります。厳密さが大事にされており、これは資料としての信頼性にかかわるものだと思います。空襲のことを確認するのにいい資料だと思います。

↑防空監視哨について

ここで、防空監視哨について、お話ししておきます。防空監視哨は、米軍機や友軍機の飛来状況を確認し、監視哨本部に連絡する役目をもっていました。

集められた情報は分析され、陸海軍の司令官が「警戒警報」や「空襲警報」の発令や解除などに活用されます。監視員が軍人の哨と、民間人の哨がありましたが、数が多いのは民間の哨でした。

ちなみに、軍人の防空監視等の要員を養成する任務で設置されたのが、磐田の第一航空情報連隊です。浜松陸軍飛行学校の航空機等を監視の練習に活用したようです。

浜松市復興記念館にも、防空監視哨資料が展示されていますし、先ほども申し上げましたが、『浜松大空襲』にも浜松防空監視隊本部の記事がみえます。

↑藤枝防空監視哨の任務

ところで、藤枝防空監視哨がどこにあるかというと、藤枝市の中央にある蓮華寺池公園付近です。観光で行かれた方も多いかと思いますが、付近には藤枝市郷土博物館や藤枝市文学館などがあります。

蓮華寺池は、江戸時代に村人総出で作った人工の池で、その池の周りが公園として整備されています。公園の中には、お姫平とよばれる高台があります。江戸時代に藤枝を治めていた田中藩のお姫様にちなんでいるといわれていますが、この高台に防空監視哨がありました。

ここから静岡・清水方面を見ると、静岡の市街地は見えませんが、飛行機から物を落としているようすは十分見えます。浜松は、牧の原台地の向こうに見えるわけですが、強い光や大きい爆発音は確認でき、飛んでいる飛行機のようすも肉眼で見ることができます。防空監視哨では、実際に肉眼でも監視していましたが、三脚のついた倍率の高い双眼鏡も使っていました。

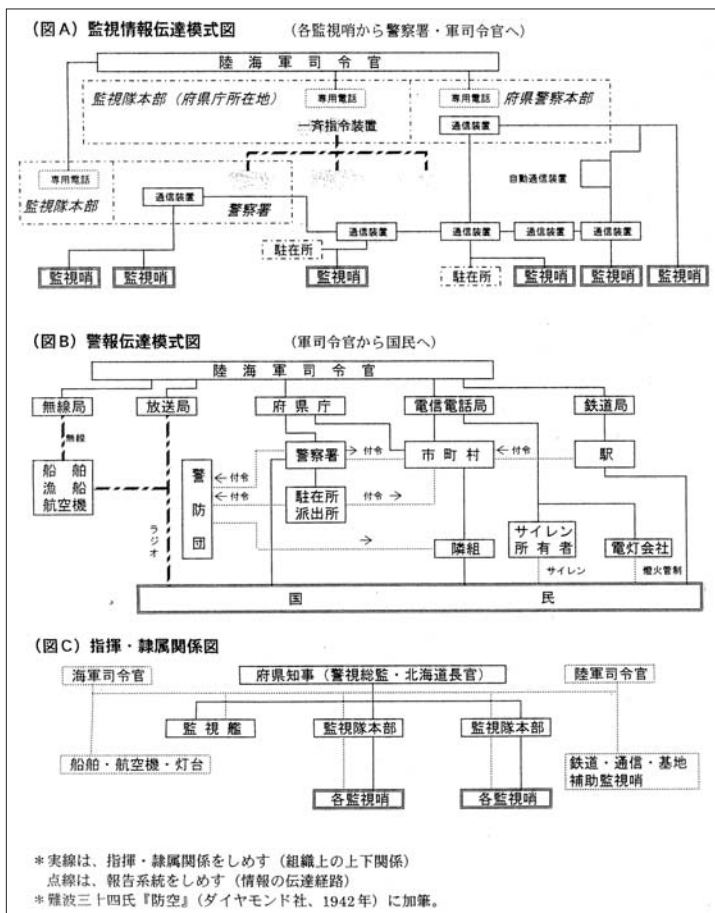
航空機の情報を得るためには二四時間体制での監視が必

要になりますから、哨員は、藤枝の場合は五つの班に分かれて朝七時交代で任務についています。主に青年学校の優秀な方々が任命されていました。

十 情報伝達の経路

より確実に監視を行うには、各監視哨にも、防空体制の現状を連絡する必要があります。藤枝防空監視哨では、その指揮・連絡事項を書き留めていました。その中に、警戒警報と空襲警報の発令・解除と対象地区範囲の記載があります。どのような形で空襲警報や警戒警報が出たのかについては、図1で模式的にまとめてみました。戦時中に出た防空関係の資料をいろいろつなぎ合わせて作ったものです。国民に伝達されるまでには時間がかかりますが、監視哨の場合は、軍からの伝達が迅速で、しかも正確です。

各監視哨で見たものが陸海軍の



司令官に上げられ、陸海軍の司令官が放送局や無線局や鉄道などを通して、あるいはサイレンや隣組などを通して国民に知らせていきます。自分が見るための情報も含めて書き留めている防空監視哨の資料は、この点についてもかなり精密なのではないかと思っています。

図1 情報伝達模式図／『藤枝市史研究』5号(2004年)より

↑藤枝防空監視哨資料のオリジナリティ

というのも、藤枝防空監視哨では二四時間体制で監視・聴音を行っているからです。日記を詳細につけている人もいますが、二四時間体制での記載は個人では不可能です。また、ラジオに頼った情報ではなく、軍から届けられる情報が記載されていることも重要です。敵機の来襲が予想されると、監視体制を強化するよう指示がきます。

さらに、監視員は監視のための訓練を受けています。軍が捕獲したB 17等を飛行させて、高度・方向を聴音する練習も、幾度となく記載されています。

藤枝の位置も重要でした。富士山に向かって駿河湾上空を飛行するB 29をとらえられるだけでなく、静岡市・清水市の上空や牧之原台地上の海軍飛行場のようす、そして浜松上空が視認できるからです。

今回、この講座の講師をお受けできたのは、藤枝防空監視哨の資料があったからです。特に、警戒警報・空襲警報の発令・解除の時刻について、このように模式化したのは初めてだろうと思います。もしかすると、東京や大阪ではあるのかもしれませんが、少なくとも静岡県域では初めてだと思います。

ただ、欠点があります。それは、軍の管区が静岡県の真中で切れていたことです。それによって、藤枝防空監視

哨に入ってくる情報は、中部軍管区（東海軍ができてからは東海軍管区）のものが大半です。ということは、表の中の「県警戒警報発令」とある「県」とは、薩埵峠^{さつた}以西の静岡県という意味であろうと思います。

この資料を加えて、これまでの浜松空襲に関する研究成果をみていきたいと思います。

B 29・M 69開発の流れ

↑戦略爆撃とは

それでは、浜松の空襲に関連する範囲で、米国戦略爆撃部隊とその兵器について、その流れをまとめてみましょう。

まず、戦略爆撃とは、「敵の実戦部隊への攻撃を任務とするのではなく、敵の産業的策源地に攻撃を加え、その機能を破壊すること」と定義しておきましょう。そのような目的のために常設された部隊を、戦略爆撃部隊とよぶことにします。

その目的の達成のためには、前線を飛び越えて、敵国の産業の策源地まで飛行して、空襲を実行できる能力を持った航空機と、その航空機から投下する爆弾の開発が必要になります。

あまり知られていませんが、日本軍も戦略爆撃専門部隊

に近い部隊を持っていました。漢口飛行場から重慶に爆撃にいく陸軍航空部隊の一つである飛行第60戦隊です。

当時の新型爆撃機（97重爆Ⅰ型）を通常の定数よりも多い航空機（三六機）と予備機を装備し、独力で戦闘機の攻撃を排除できるだけの武装を搭載（機体の改造）していました。浜松の重爆部隊の一部がもとで編成された部隊です。重慶の市街地への爆撃を行っていました。「目標市街地」「全弾命中」と記された資料が、防衛省防衛研究所に所蔵されています。

米国は、ドイツ軍の英国本土空襲や日本軍の重慶爆撃等で、それぞれ数千人の死者が出たことを批判していました。したがって、昼間に、高々度から、高性能爆弾で、目視により、軍事施設や軍需工場等のみを破壊する爆撃方法をとる考え方が主流でした。

十 焼夷弾の威力

一方で、ドイツ軍の英国本土空襲で使用された焼夷弾の威力にも注意が払われてきました。住宅地への焼夷弾の攻撃は、破壊力が大きいことに注目したのです。

焼夷弾は、火災により施設の焼却を狙うものです。ここでは、詳細な分類は避けて、焼夷弾を狭義の焼夷弾と焼夷爆弾に分けて説明しましょう。

狭義の焼夷弾は、筒に油脂等が詰められたものです。油脂等に着火させる目的で頭部に少量の火薬が詰められていますが、爆発により殺すことをねらったわけではありません。火炎の吐き出して火災を起こさせるのが目的です。ただ、火炎の吐き出しの反動で動きますから、危険なものでもあります。

それに対して焼夷爆弾は、筒内の油脂等に着火させるのに必要な量以上の火薬が詰められています。爆発によって油脂類が飛び散り、消火活動や避難活動を妨げる目的のものです。日本本土への空襲では、約三割が焼夷爆弾であったことが確認されています。

焼夷弾は、密集建造物のある土地でなくては効果が少ないですから、市街地に集中して投下する必要があります。したがって、拡散を防ぐために低高度での投下が求められます。

そうになると、防空側の地上砲火は峻烈になり、戦闘機の緊急発進も容易になりますから、夜間攻撃の必要性が高まることで、目視によらない攻撃、すなわちレーダーの装備が必要になってきます。夜間に、低高度から、焼夷弾で、レーダー等により、市街地そのものを破壊する爆撃方法がとられるわけです。

↑焼夷弾の開発

そこで問題になるのは、投下地に適した焼夷弾の開発でした。日本のような木造家屋の場合、あまり重い焼夷弾だと、もつとも効率よく焼夷効果のあがる屋内にとどまらず、地面までつきぬけてしまいます。

無差別爆撃を批判した米国では、焼夷弾の開発は、英独に比べて遅れました。軍事施設等の耐久建造物を攻撃する一〇〇ポンド焼夷弾は一九四〇年一月には完成させますが、小型のものは一九四一年五月に英国のものを移入したとされています。

しかし、米航空隊はそれではしませんでした。ユタ州ソルトレイクシティ郊外の爆撃試験場に日本家屋二〇棟とドイツ家屋九棟を建設し、塗料や内装、家具にいたるまで復元し、焼夷弾投下実験を実施しています。

日本の家屋に使われているヒノキはアメリカでは手に入らないので、最も似ている木材をソ連から調達し、畳はハワイに移住した日本人の家屋のものを集めたといわれます。一九四三年五月のことでした。そこで日本家屋にもドイツ家屋にも適した焼夷効果のあったものとして、M 69収束焼夷弾が選ばれました。

↑M 69収束焼夷弾

M 69収束焼夷弾は、一本が直径三インチ（七・六二センチメートル）、長さ二〇インチ（五〇・八センチメートル）、重さ六・二ポンド（二・八〇九グラム）の正六角柱で、それが三八発集めて一つの大きな爆弾のような形状をしていました（図2）。

それが投下数秒後にバラバラに別れ、一つ一つの焼夷弾は尾部から白い布をはためかせながら落下していきます。その重さと落下速度が日本家屋に適し、瓦屋根を貫通して天井裏か畳の上で発火するものでした。実験写真を見ると、二階建ての日本式家屋は、二〇分で一、二階とも全焼しているようすが確認できます。

一九四三年一〇月一五日、実験スタッフから米航空軍司令部にレポートが提出されました。『情報部焼夷弾レポート』と題されたレポートには、「東京はじめ大阪・名古屋・神戸などでは住宅密集地に隣接して大小工場が多く存在する。このようないわば混在地域では、焼夷弾による延焼率が高く、空爆目標に最適である」とあります。

当時の欧州戦線では、昼間高々度精密爆撃が威力を発揮していましたし、焼夷弾の生産も軌道にのっていませんでしたから、このレポートによって状況が変化したというわけではありません。しかし、一九四三年秋の時点で、米軍

が焼夷弾の効果を十分認識していたことは、疑う必要はないでしょう。

↑B 29の開発

次が、戦略爆撃を実施する航空機の開発です。日本本土はB 29によって焼き払われたのは御存知だと思います。B 29は、当初はドイツが中南米に基地を設けた場合に爆撃できる航空機として着想されました。一九三九年十一月のこ

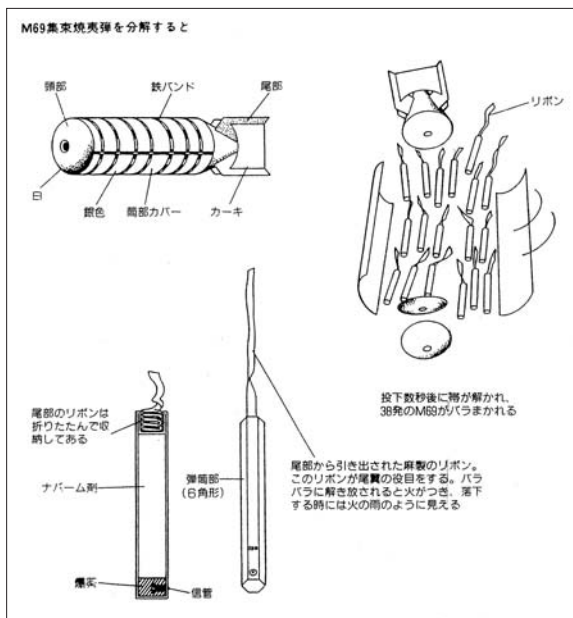


図2 M69収束焼夷弾の仕組み／平塚征緒『米軍が記録した日本空襲』より

と思われる。

一九四〇年五月には、まだ試作機が飛んでもいないうちに、B 29の生産について調印され、一九四一年九月には二五〇機が発注され、一九四一年二月にはさらに二五〇機が追加されました。

B 29の試作機ができたのは一九四二年九月。一九四三年一月のカイロ会談で対日本本土爆撃計画であるマッターホーン計画が承認されていきます。B 29本体と焼夷弾は、同時に開発されていたのが分かります。

B 29のデータを確認しておきましょう。翼長が約四三メートル、全長が約三〇メートル、乗員は定数一一名（実際はそれ以上乗っている場合もそれ以下の場合もあります）、与圧装置付きの機内に、遠隔操作の防御火器として、二〇ミリ機関銃一二丁と一二・七ミリ機関銃が一二丁が搭載されています。

銃手は震動と騒音から離れ広い視界のなかで操作にあたるができます。射手が照準するコンピューター連動の照準機は、的までの距離・高度・気温・風速を自動解析します。後年、朝鮮戦争でミグ15の迎撃にあつたB 29が撃墜をまぬがれたのが、この防御砲火によるものでした。

巡航速度は時速三五〇～四〇〇キロ、最高速度は時速五六〇キロ程度です。爆弾搭載量は五〇〇〇ポンド（約二・三

トン)ですが、浜松空襲の頃には、機銃を減らして六・七トンの焼夷弾を積んだ機が現われます。レーダーが全機についているのも特色です。

†B29の性能

B29の特色でもありネックでもあったのが、スーパー・チャージャー付きの二二〇〇馬力エンジン四基です。一九三六年に開発が始まりました。

実は、B29にとっての一番の敵は、偏西風でした。日本の上空はものすごいジェット気流が流れています。B29は完璧にできているようにみえますが、四〇〇機以上も落ちていきます。しかも、高射砲によつて落とされたというより、故障で落ちているのが案外多いのです。原因はエンジントラブルが多いと考えられています。

もちろん当時の日本の技術では開発できない、あるいは開発はできても材料がなくて作れないようなエンジンでした。日本軍も、フィリピンで捕獲したB17の過給装置をコピーしようとしたが、ファンの回転・温度に耐えられない素材を確保できず、量産はできませんでした。しかし、B29にとつても、最後までネックになったのがやはりエンジンだったのです。

今の自動車のエンジンを考えてみてください。シリンダー

の中を真空状態にして、その中に空気とガソリンの混合気を給入し、点火・爆発させて動力にしています。爆撃機にとつては、高空に行けば行くほど、高射砲の弾が届かないですし、敵の戦闘機も上がってこれませんから、被害が少なくなります。しかし、高空に行けば行くほど空気が薄くなりますから、エンジン内に空気を入れようとしても、バキューム原理だけではエンジン内に入る空気の量が確保できず、したがって出力が低下します。

たとえば、B29のエンジンは五万四〇〇〇ccありますが、その中に入ってくる量が三分の一になってしまうと、馬力も三分の一しか出なくなります。それを補うために、排気を動力としてファンを回し、空気を強制的にエンジン内に送り込むことで出力低下を防ぐ方法がとられます。それが今ターボ・チャージャーやスーパー・チャージャーといわれるものです。

今、普通に走っている車でも、ターボ・チャージャーやスーパー・チャージャーが付いているエンジンがありますが、インタークーラー付きという車も多いのではないかと思います。インタークーラーとは、ファンで押し込んで熱く薄くなった空気を、送り込む途中で冷やすことで濃くしてエンジンの中に入れるための機械のことです。B29のエンジンにもインタークーラーが付いています。したがって、高々

度性能が日本軍戦闘機とは比較にならないほど優秀だったのです。

↑B29の弱点

しかし、一方で超高速で回転するファンの安定性は不十分で、均質な作製が難しいことから破損したり、高熱に耐えられず発火したりしました。しかも、そのオン・オフを半分手動、半分コンピュータでやっていて、その操作に慣れていないと、オーバーヒートを起こすようなのです。試作機二機はオーバーヒートで火に包まれ、特に一九四三年二月一八日にはボーイングの主任操縦士ほか乗員一〇名が死亡する事故も発生しています。

もともと、夜間焼夷攻撃の場合は、低高度での投下になりましたし、迎撃の任務にあった日本軍戦闘機の方が高速でしたから、探照灯を投射しての迎撃は可能であったはずですが。しかし、その頃は硫黄島に進駐した米陸軍戦闘機が援護につきましたので、初期は高々度であるがゆえに、後期は随伴戦闘機が存在が想定されたために、戦闘機による迎撃は、あまり効果を期待できなかったということがいえます。

あとは地上にあるうちに攻撃することでした。硫黄島を経由してのサイパン攻撃は浜松からも浜松教導飛行師団を

母体に編成された独立飛行隊などが実施されますが、硫黄島が戦場化してからは、不可能になっていきます。

日本空襲の流れ

十空襲の始まり

まず、日本空襲は、中国成都から北九州に向けての空襲からはじまります。B29の航続距離をもっとしても、北九州が限度でした。一九四四年六月一六日が最初です。

成都への進駐は、蒋介石が対日戦列から脱落するのを防ぐ目的もあったといわれます。ヒマラヤを越えての空輸にたよる補給状況であり、満足な基地機能でなかったのは明らかでした。

マリアナ諸島が日本本土空襲に適した距離にあり、飛行場の適地も多いことから、成都からの北九州空襲が開始された頃には、米軍は占領に向けての具体的な作戦を実施していました。

一九四四年七月七日に、サイパン島の日本軍の組織的抵抗が終わります。テニアン島が八月三日、グアム島が八月一日です。一月には運用ユニットとして完結する一個爆撃機集団のマリアナ進駐にして、すぐに日本本土の偵察を行います。

藤枝防空監視哨の資料には、一月一日の一三時二二分～一四時三五分に空襲警報が出ていることが記されています。B 29の偵察機型をF 13といいますが、その形式であることが、米軍資料に記されています。

資料をみると、お昼くらいの時間に警戒警報や空襲警報が出ていることが分かります。B 29の巡航速度では、マリアナから本土まで約七～八時間ですので、夜明けとともに離陸した偵察機は、この時刻に静岡県上空に現われるのでしょう。

マリアナのB 29部隊の日本本土初空襲は、一月二四日です。一月七日～一月二三日までの間は、空襲警報一回のみと警報発令が少ない状態が続くのが分かります。

撮影写真の分析をもとに、B 29部隊のマリアナからの初空襲が行われます。一月二四日です。第73爆撃ウィングによる中島飛行機武蔵製作所への昼間精密爆撃です。

中島飛行機の武蔵製作所は、日本軍機のエンジン等の重要部品を製造している重要工場と米軍は理解していたし、事実そうでした。一一一機が出撃し、武蔵製作所を攻撃したのは三五機（三三二％）で、その他は臨機の目標に投弾しています。県内では五機が爆弾九発と焼夷弾二個を松崎に投弾しているようです。

↑無差別都市空襲

米軍は、ドイツ軍や日本軍の無差別都市空襲を批判し、軍需工場等に対する精密爆撃を信条としたはずです。しかし、日本上空で出会った最大の敵は、雲と風でした。雲がかかった場合は第二、第三の目標が指示されましたが、その目標への投弾も不可能なら、臨機目標への投弾を指示していました。

日本列島のように海に高い山が面しているような場所は雲が発生しやすく、第一目標への投弾は難しい場合も多々ありました。

一方、偏西風はすさまじく、偏西風にのった場合、対地速度は時速七〇〇キロ近くになった場合もあったようです。そうになると、高々度からの精密爆撃など、実施できようはずがありません。また、臨機目標への投弾は軍需工場のみを目標にするはずありません。

すなわち、日本は米国爆撃部隊の信条とは別に、当初から、目標をそれた高性能爆弾や、臨機目標に投弾された高性能爆弾により、結果として日本本土は無差別爆撃の場になったといっていでしょう。

↑B 29部隊

ここで、B 29部隊について確認しておきましょう。B 29

部隊は、一般の米陸軍航空隊とは別系統で運用されていた。そうでないと、B 29を戦術的に利用されてしまうからです。

米軍の統合幕僚会議のもとに第20航空軍（エアフォース）があり、その下に第21爆撃軍（No.21爆撃コマンド）があり、その下にいくつかの爆撃ウイングがあります。

一月当初は第73爆撃ウイングだけでしたが、だんだん増強されていきます。爆撃ウイングは一二〇機程度のB 29を保有しています。今後、浜松等、中小都市への空襲は、この爆撃ウイング単位での攻撃になります。

第21爆撃コマンドの下には四つの爆撃ウイングが配備されていましたので、浜松などの地方都市は、一夜で四都市がほぼ同時に攻撃されるのが常でした。

↑浜松初空襲

一九四四年一月二七日が浜松初空襲です。第73爆撃ウイングが、中島飛行機武蔵製作所（第二目標東京市街地・港湾施設）をねらいました。そのうち七機が臨機目標として浜松を爆撃しました。藤枝防空監視哨の資料でも、二七日はちょうどお昼頃に空襲警報がでている記載があります。

ここで、防空監視哨の資料をみてみましょう。空襲警報が中二日～三日で発令されています。米軍の資料でも、日

本土への攻撃日は一月二七日、二九日、二月三日、八日、一日……とあります。藤枝資料の警報発令・解除はF 13等に対するものなのでしょう。

出撃して昼間爆撃をすればマリアナに帰るのは夕刻～夜になりますから、翌日補給と爆撃成果の偵察飛行を実施し、分析して搭乗員に確認し、出撃するのは三日後、ということなのだろうと思います。

次に浜松攻撃の記載があるのは、二月一三日です。第一目標は三菱重工業名古屋発動機製作所です。七一機（七九%）が第一目標に投弾、残りの一機が浜松に投弾しました。佐藤・天神・木戸・相生・中島一帯に爆弾が投下されています。

次が二月一八日で第一目標は同じで浜松には一機、次が二月二二日で第一目標はやはり同じで浜松には一機、次が二月二七日に中島飛行機武蔵製作所が第一目標で藤枝では北に向かうB 29を四二機視認しています。浜松郡部に投弾の記録があります。

↑浜松への投弾のようす

さて、ここで、阿部氏の整理にしたがって、浜松への投弾のようすを確認してみましょう。これまで、浜松は「爆弾のゴミだめ」と表現した、一九四五年一月二〇日から爆

撃コマンドの司令官となったルメイの回想の言葉により、目標に到達できなかったB 29は浜松に投弾するように指示されていたと理解されてきました。

阿部氏は、米軍資料の「浜松」とは何を指すのかを、西遠州地域の「常識」（浜松市街地）ではなく、米軍の資料から確認されました。

図3は、阿部氏が書かれた『米軍資料から見た浜松空襲』に載っている地図で、米軍がいう浜松の位置を示しています。もちろん現在のように合併して大きくなった政令指定都市の浜松ではなく、もっと狭い範囲の市街地でもあります。図3の数字は米軍の空襲の識別番号です。21が「HAMAMATSU」と書いてあります。ここから阿部氏は、浜松とは西遠州から東三河くらいまでの範囲を指しており、都市名というよりは米軍の設定した地域名として理解すべきであるとの見解を述べられました。

ですから、米軍が浜松に爆弾を落としたといっても、浜松市街地に落としたのか、それとも磐田から豊橋までの間のどこかに落としたのかは厳密には分かりません。しっかりと資料を読んでみると、全部が浜松の市街地に落ちたことになってしまい、浜松の小さい市街地にもすごい量の爆弾が落ちたことになってしまいうことになるわけです。

このように「浜松」の範囲を設定して考えてみると、レー

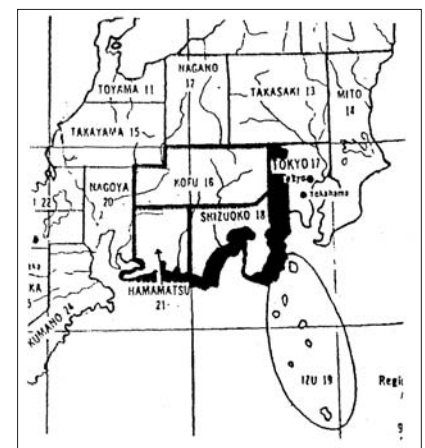


図3 中部地方の空襲識別番号／阿部聖『米軍資料から見た浜松空襲』より

ダーでも目視でも確認しやすい浜名湖が中心にあるこの地域が、目標を確認できなかったB 29が洋上でやすい地点であることが分かります。そしてそこに爆弾を投下していくようにという指示だったようです。

一九四五年一月の空襲

次の一月三日が名古屋ドックが第一目標、浜松には九機で植松・神立・天神・名塚・向宿・子安にと、湖西にも投弾がありました。

次が一月九日で、第一目標は中島飛行機武蔵製作所で浜松には六機。

次が一月十四日で、第一目標は三菱重工業名古屋航空機製作所で浜松には一機。三ヶ日・岩水寺・見付・天竜にも着弾の記録がありますから、一機ではないかもしれません。

次が一月一九日で、第一目標が川崎航空機工業明石工場。

浜松には二機（神立・上西・細島・曳馬）。

次は一月二三日で、第一目標が三菱重工業名古屋発動機製作所。浜松には投弾の記録がありませんが、湖西にありません。藤枝資料によれば、県内に空襲警報は出ませんでした。

次が一月二七日で、第一目標は中島飛行機武蔵製作所、浜松には二機です。飯田に着弾しているほか、舞阪にも記録があります。この日はいわゆる銀座空襲の日です。武蔵製作所が雲で覆われ、レーダー爆撃した高性能爆弾が、銀座に着弾しました。

この日以外に着弾の記録がある日があります。これはどのように解釈すべきかわかりません。正式な攻撃ではない日の投弾記録ということになります。通常爆装しないF13が投弾したのか、偵察にきたB29が投弾したのか、詳細は分かりません。ルメイ自身も、「浜松に投弾した正確な回数は分からない」と記しています。

十一月四五年二月の空襲

さて、二月からは第73爆撃ウイングのほかに、第313爆撃ウイングが攻撃に参加するようになります。二つの爆撃ウイングが、あるいは同時に、あるいは違う日に、本土空襲を実施していきますので、警戒警報・空襲警報の発令が、

次第に複雑になっていきます。

また、硫黄島攻略のための支援作戦として、日本本土の航空基地等への、米空母艦載機の戦術攻撃が、これに加わります。第313爆撃ウイングはB29に習熟するために、パガン島やトラック島も空襲していますが、ここでは日本本土に関連したものだけを取り上げます。

二月四日は、両ウイングが第一目標は神戸市街地として攻撃、浜松への投弾はありません。ここで市街地を第一目標としていることが注目されます。爆撃コマンドの司令官が、一月二〇日にカーチス・ルメイに変わっての変化と考えることができると思います。

ルメイは日本の工業力を奪うには、市街地の焼却が肝心であるとの持論をもっていました。下請け工場・従業員の住宅そのものを奪うことが、日本の生産力を奪い、勝利への早道との考えです。ドイツへの焼夷攻撃によりその有効性を実感しての持論でした。

焼夷攻撃は無差別攻撃です。こうした考え方を持つ人物が、爆撃コマンドの司令官となったということは、米国の爆撃方針が変化した、と考えて良いと思います。

しかし、ルメイが司令官になって、通常爆弾での攻撃がなくなったり、昼間攻撃がなくなったわけではありません。焼夷弾の生産量も限りましたし、攻撃方法そのものの

を変化させるわけですから、搭乗員の訓練等も必要です。

特に、編隊を組まず、単機低高度で、夜間にレーダーなしは火災を目視して侵入、投弾後急旋回して離脱、という方法は、危険な要素の大きい攻撃方法であり、第73爆撃ウイング以外の部隊の習熟も必要であつたろうと推測します。

次が二月一〇日で、第一目標中島飛行機太田製作所、浜松へは意図的に牽制部隊として二機が投弾し、砂山・寺島・北寺島・龍禪寺・中島・領家に着弾の記録があります。

二月一五日は、両ウイングによる第一目標が三菱重工業名古屋発動機製作所への攻撃で、浜松へは一一機が投弾とあります。一方で、浜松に五四機との記載もあります。帰還時に通過した数かもしれませんし、「浜松」のとらえかたの違いかもしれません。

二月一六日、一七日は、航空母艦レキシントン等からの艦載機の波状攻撃です。戦闘機・艦上爆撃機・艦上攻撃機九五機と二〇機でした。

藤枝資料をみると、夜明けとともに空母を発艦し、日没に間に合うように帰投しているようですがわかります。県内の軍事施設は、大打撃を受けました。藤枝資料には、空襲を受ける海軍の大井飛行場と藤枝飛行場のようですが確認できません。また、『浜松大空襲』でも、この日の機銃掃射の体

験談がいくつか載っています。

B 29部隊の次の空襲は二月一九日で、両ウイングによる第一目標が中島飛行機武蔵製作所への攻撃。浜松への投弾はなし。

次が、両ウイングに第314爆撃ウイングが加わって、二月二五日に東京市街地目標の空襲がありました。浜松へは一一機が投弾し、馬込・八幡・富塚・泉・助信・新津・寺島・海老塚・積志・笠井新田に着弾しています。

一九四五年三月の空襲

そして三月四日が第73・第313ウイングによる中島飛行機武蔵製作所への攻撃で、浜松へは九機による投弾、東伊場・泉・高林・曳馬・雄踏・大久保への着弾です。湖西・大知波にも投弾の記録があります。

そして、三月一〇日の東京大空襲の日を迎えます。九日～一〇日にかけての県内は、警戒警報が二回出ているだけで静かです。それもそのはず、三ウイングの全力三二五機が東京に投弾します。夜間・単機侵入・低空・レーダーと炎の目視による焼夷攻撃の開始です。

間髪を与えず、三月一～一二日に名古屋市街地に三ウイングの三一〇機、浜松に一部が投弾とあり、藤枝監視哨では浜松方面に強光七回を視認しています。

三月一三日に、三ウイングの二九五機が大坂に、三月一六日は神戸、一八日がもう一度名古屋を空襲という状態です。

そして、三月末から四月中旬にかけて、焼夷弾を使い果たして補給を待つ爆撃コマンドは、軍需工場への昼間高々度精密爆撃、瀬戸内海への機雷投下、そして、ルメイが猛反対したと伝えられる、沖縄上陸作戦のための九州南部の飛行場攻撃という戦術利用がなされます。

三月一三日から三月いっぱいまで、県内は、警戒警報だけで空襲警報がほとんど出ない、比較的「静かな」日が続きます。

これを見ると、夜間焼夷攻撃は、米軍の意図しないもう一つの効果と一つの損失があったことが確認できます。低空でまっすぐに東京市街地に向かうB29を、県内の監視哨は聴音・目視をできていません。

高々度を昼間飛行していた時には、駿河湾上空を飛ぶB29を聴音できていました。夜間飛行することで視認はできず、低空を飛行することで、聴音範囲も限定されるのです。う。

一方で、それは警報発令地域の限定という形にもつながります。警報発令による待避作業によって、生産が遅滞するという範囲は、少なくなるのかもしれませんが。

十一九四五年四月の空襲

四月～五月初旬まで、米軍資料には九州南部の日本軍飛行場の名称が第一目標に記入されていることが多く、沖縄作戦支援爆撃が多いことが分かりますが、B29部隊は日本本土に習熟したらしく、同日にウイングごとに別目標が指示されていきます。そのなかには、本土の軍需工場を第一目標とする記載にも出会います。

四月三日～四日は、群馬県の中島飛行機小泉製作所と立川飛行機とならんで、静岡市の三菱重工静岡発動機製作所が第314爆撃ウイングによって、夜間攻撃を受けています。

浜松で空襲を受けた記載があるのは四月七日で、第73爆撃ウイングが中島飛行機武蔵製作所を、第313・314の両ウイングが三菱重工名古屋発動機製作所を、昼間爆撃した時です。野口・助信・新津・成子・菅原・宮竹・和合・半田・積志に着弾の記録があります。

四月二四日は、第73爆撃ウイングが第一目標の日立航空機立川製作所ではなく、「静岡飛行機工場」を爆撃したとあります。藤枝で一二〇機が視認されている昼間爆撃です。

そして、四月三〇日空襲として知られている、浜松を第一目標とした昼間の高性能爆弾による空襲を迎えます。中島武蔵、三菱名古屋等の主要工場の機能が麻痺したと判断したのでしょう。

この日は、立川陸軍航空工廠とならんで、浜松の楽器会社（日本楽器）と浜松市街が記載され、第73ウイングの七九機が浜松に投弾し、火災が起ったと記されています。

ここで、日本楽器について説明しなくてはなりません。楽器メーカーは精密機器の使用や、木工技術が集積されていることから、軍需工場に転用しやすいことは、第一次世界大戦のヨーロッパで実証済みであり、日本楽器でも第一次大戦後、特に木製プロペラ（ちゃんな印象ですが、金属製よりも圧縮合板のプロペラの方が、柔軟性もあって大出力エンジンのペラに向いているという書物もあります）では、かなりのシェアを誇っていました。

レシプロ飛行機はペラがなくては飛びませんから、米国の合理的な考え方が、日本楽器の攻撃順位を高めたのでしょう。日本楽器のプロペラ生産については、荒川先生からお話があったと思います。

十一九四五年五月の空襲

五月は、まだ沖縄戦支援のための九州南部の飛行場攻撃と、それに関連してか関西以西の都市と機雷投下が攻撃目標になっています。

そのなかで、五月一九日空襲があります。第一目標は立川陸軍航空工廠・立川飛行機工場・浜松市街地（レーダー）

です。浜松には二七二機が投弾とあります。浜松東部と北西部に着弾の記録があり、米軍資料にも六四エーカーが焼失と記されています。

この頃から、藤枝で目撃される敵機にB24が目立つようになります。超低空で単機で侵入し、南方に去っていくのです。お昼くらいに来ることが多く、硫黄島からの飛来でしょう。

五月二四日、二五日、二九日に、それぞれ一機、三機、二機の飛来を確認できますが、これは前二日が東京市街地、二九日が横浜市街地が第一目標です。

これを機会に、機雷投下と併行しながら、もういちど大都市とその周辺の航空機関連工場が目標になっていきます。沖縄支援作戦の間に復興した施設の破壊が狙いだったのかもしれません。

十一九四五年六月の空襲

六月九日、一〇日も投弾の記録がありますが、この両日も広範囲の軍需工場が第一目標になっています。そして、六月一八日を迎えます。

先に述べたとおり、米軍には英本土航空戦等の戦訓もあって、都市への焼夷攻撃の有効性を支持する人たちがいました。そのなかで最も目立った活動をしたのがルメイという

ことになります。

焼夷弾の開発一つとってみても、ルメイの思いつき一つで攻撃方法が変わったわけではありません。浜松等の地方都市空襲についても、ルメイが「大都市は終わったから次は地方都市だ!」と思いついたのではありません。

米軍は、マリアナ諸島占領の後すぐに、日本空襲の際に攻撃する都市の一覧を作成しています。そして、その攻撃方法も単純に東京空襲の縮小版として実施されたのではないのです。

実は、小さい都市ほど、たくさん焼夷弾を落としています。人口に対しての焼夷弾の投下率は、浜松の方が東京などよりも多いのです。浜松や静岡レベルでは、市民一人に対しておおよそ筒を二本落としています。ですから、もう消火ができるはずもない状態です。

なぜかという、焼夷弾は、延焼効果、つまり火事を起こすことによってその街を丸ごと焼いてしまうのが目的なので、東京のように密集地帯がたくさんあると、火災が火災を呼ぶという形になりますが、浜松のような小さい地方都市では投弾場所が限られることから、一度に焼いてしまわないと、もう二度と焼けなくなってしまう。そのため、小さい都市ほど高密度に焼夷弾を投下するよう計画されたのです。

焼夷弾一つ一つの割合で考えると、都市人口一人に対して一・八筒の焼夷弾を投下するのを平均としています。同時に、圧縮度も高い目標が設定されています。つまりは、単機侵入が原則であっても、前後のB 29とは至近距離で侵入し、一瞬で通り過ぎる目標に向かって焼夷弾を投下し、それぞれマリアナまで帰投しなくてはならないわけです。

実際には、F 13かB 29による天候観測機が実際の爆撃の直前に状況確認し、一ウイング一二〇機程度のB 29が、浜松の場合は六六分、静岡の場合は一二三分、清水が九七分、沼津が九九分、一機ずつ投弾していきます。浜松では三〇秒に一機、静岡では一分に一機の割合での投弾ということになります。

静岡空襲の場合は、藤枝監視哨で一機ずつ把握して記載していますが、もう少し間隔があるように感じます。圧縮度は、目標値に近いように都合よく報告されているのかもしれない。最初の数機は、ベテランレーダー手・爆撃手が乗り込んで、目標点（浜松は板屋町交差点、静岡は本通りと静銀本店前）に焼夷弾を投下し、残りのB 29はその火に向かって焼夷弾を投下したのです。

投下された側では、浜松でも静岡でも、「周囲から火をつけて逃げ道をふさいだ」「上空からガソリンをまいて火災をおおった」と体験者の話にありますが、収束焼夷弾をその

ように意図的に散布はできないし、火災発生のもと上空からガソリンを撒いたら自機が被災しますから、そのような事実はありません。

しかし、結果として次々やってくるB 29は狭い市街地に次々投弾して去りますから、火災が不規則に起きて、そのような印象を与え、次々投下された収束焼夷弾がバラバラになる時や地上に落ちての火炎放射の際には、油脂類は飛び散ったと思われます。

なお、県内では沼津が小型ながら火炎放射力の強い焼夷弾が数多く投下されており、焼夷率も高くなっています。

当時は、焼夷弾は投下の際には防空壕で待機し、その後消火作業を行うよう訓練がなされていました。浜松・静岡では、ふみとどまって焼死した方や、防空壕を信じて窒息された方も多いようです。

静岡市に救援活動に入った人を中心に、惨状を目にした清水の人たちは、逃げるのを優先したために、静岡約二〇〇〇人、清水約三五〇人と、その犠牲者数に大きな開きが出たとされています。

私はそのほかに、本土決戦部隊が築城した陣地への避難を許さなかったという証言に注目しています。艦砲射撃の時は許されたとあり、具体的ですから、そのとおりなのでしょう。防諜という観点もあるのですが、軍民一帯と

なった本土決戦など、最初から計画されてないなかったのです。

浜松空襲で亡くなった方は、約三五〇〇人といわれます。戸籍に登録されないまま亡くなった乳児や、たまたま浜松にきていて亡くなった方もいらっしやるでしょうから、正確な数の把握は非常に難しいものがあります。

一人一人がかげがえのない命を落としているのですから、一人一人が確認されていく必要があるでしょう。焼夷弾の雨の中を油脂を浴びながら逃げた体験を語ることのできる人がいらっしやるうちに、その作業は行われる必要があると感じます。

一九四五年七月・八月の空襲

さて、その後も浜松には数機ずつ投弾していくB 29がいます。B 24やF 13がお昼頃にやってくるのも日常化し、三日に一度は深夜に空襲警報が出ます。

そして、七月一六日の沼津空襲以後は、マリアナのB 29・F 13、硫黄島のB 24、七月二四日からは空母艦載機による戦術攻撃が重なっていきます。

七月二四日、二五日、三〇日などは、日中空襲警報が出っ放しという状況です。

そして、七月二六日一機のB 29が八時五分に将監町に、

一発で四トンの重さのある、超大型爆弾を投下しています。そのほかに、島田と焼津にも投下され、島田では市街地に落ちて大きな被害ができました。

原子爆弾と同じ形状・同じ重さのもので、原子爆弾の投下訓練でありました。このような状況を、枝村三郎氏は「混爆」と表現しています。被害者からみた視点としては、そのような印象であつたと思います。

七月二九日の艦砲射撃は、英軍のキングジョージ五世を含めた、米英連合の戦艦・巡洋艦による艦砲射撃のあつた日です。すでに浜松は焼け野原で、ルメイは海軍に戦果を横取りされるのを恐れて、浜松はすでに灰であることを示して抗議したといわれます。

清水でも浜松でも、終わりがはっきりわからない艦砲射撃は、砲弾の着弾音や震動も含め、非常に怖いものであつたと記憶されています。

清水の事例は、渡辺晴男氏が米駆逐艦乗員だった人とメール交換をして、一艦一艦の射撃のようすを復元しています。米軍の記録では五分、渡辺氏の復元では一〇分の砲撃でしたが、清水市民の感想はおよそ三〇分との記載が多く、恐怖による時間感覚のずれであろうと思われます。

米軍資料による最後の浜松空襲は、八月一日です。その日は、八王子・富山・長岡・水戸が各ウイングの攻撃目標

です。しかし、八月七日には都田で空襲を受けた記載があります。その日は豊川海軍工廠が第一目標ですので、その関係なのでしょう。

おわりに

浜松の戦争遺跡を考えるうえで、浜松空襲は避けて通れないことから、この話題を取り上げました。馬込川にかかる橋に弾痕が残っている場合がありますが、「これが浜松空襲の痕なのだ」という理解になるか、「これが何月何日の空襲で、市民何人の命を奪った空襲の痕なのだ」という理解になるか、さらに「これが何月何日何時何分に、〇〇さんの命を奪った空襲の痕なのだ」と表現できるのかによって、戦争遺跡の持つ意味は違ってくるように感じます。

詳細になっていく歴史研究の行方が、単なる正確さの追求や、マニア的な関心を充足するものではなく、人の命を前にしての、平和のための戦争理解というかたちで進んでいく必要があると思います。

今日は細かいお話をしました。不思議なことに、私の家族親族で、戦争で亡くなった人はいません。

母方の祖父は中部電力に勤めていて電気工事等ができた人でした。そのような人が優先的に徴兵されるので、中国

戦線に三度も召集されました。最後は四二歳で行って、「もうおれは帰ってこん」という話をして行ったそうです。負傷して寧丸の一つをなくしましたが、何とか生きて帰ってきました。

父方の祖父は、指物もする大工でしたが、身長が一四八センチメートルで、徴兵の身長が一五〇センチメートルからでしたので、それで応召を免れました。ただ、中島飛行機に徴用でとられて飛行機の増加タンクをつくり、空襲を受けましたが、生き残りました。

私が生まれ育った家は、昭和七年に父方の祖父が自分で建てたのですが、中島町にありながら空襲も艦砲射撃にも生き残り、現在も建っています。この家も実は戦争遺跡で、機銃掃射を受けて壁に穴が開いた跡があります。

母は半田町で生まれ育ちました。浜松大空襲の夜に祖母は肋膜炎で動けず、国民学校三年生だった母は伯父とともに叔母を背負い、もう一人の叔母の手を引き、台地上に逃げました。幸い半田町はその日は被災しませんでした。空襲・戦争を嫌悪しています。

戦争は、死者を出さなくても、人の心に傷を残します。戦争はいやだという気持ちがある以上、戦争を体験した人の気持ちレベルまで実証できる詳細な研究が必要だと感じています。

最後に、「夕闇がさまった空に、敵機がとんでくる。味方の高射砲は高空を飛ぶ敵機には届かない。われわれは憎しみをもって、敵機をにらむほかはない」と記した人がいます。記したのは、中国の詩人で場所は重慶。重慶は一九三八年から一九四一年まで、冬の時期は霧にかくれるとはいえ、特別編成の日本軍戦略爆撃部隊の空襲を受けたのです。その部隊の用法は、浜松陸軍飛行学校で研究され、浜松の飛行第七聯隊の一部が母体となって編成されたこと、そして、浜松市民は、無意識・間接的とはいえ、それを支えた事実があることも、記憶されなくてはならないでしょう。

参考文献

山本七平『一下級将校の見た帝国陸軍』朝日新聞社、一九七六年

浜松空襲・戦災を記録する会『浜松大空襲』一九七三年

奥住喜重『中小都市空襲』三省堂、一九八八年

静岡県『静岡県史資料編20 近現代5』一九九三年

小山仁示『米軍資料日本空襲の全容』東方出版、一九九五年

平塚征緒『米軍が記録した日本空襲』草思社、一九九五年
浜松市立中央図書館『浜松市戦災史資料』一、四、一九九五

）一九九九年

竹内康人『浜松の戦争史跡』人権平和・浜松、二〇〇五年

阿部聖『米軍資料から見た浜松空襲』（愛知大学総合郷土研

究所ブックレット12）二〇〇六年

竹内康人『浜松・磐田空襲の歴史と死亡者名簿』人権平和・

浜松、二〇〇七年

※藤枝防空監視哨の記録をもとに、警戒警報・空襲警報の発令・解除を一覧化した表を資料にしましたが、二〇一〇年三月刊行予定の『藤枝市史研究』に掲載の予定です。詳細を確認されたい方はご覧ください。